

原点回帰の初仕事は 創作オペラ「鶴」

関根正さん

プロデューサー／アド・フォンテス代表



この十一月に創作オペラ「鶴」を上演し、初のプロデューサーを務めた関根正さん。名古屋の大手舞台製作会社に勤務、華やかな舞台を陰から支えた。フリーとなったいまも、舞台にかける情熱はいささかも衰えない。半世紀以上にわたる舞台づくり人生を振り返りながら、新たな第一歩への意欲を語ってもらった。

二十年前ぐらい前、日本の創作オペラを見たとき、問題があると思いました。曲と歌がうまくかみ合っていない。違和感があり、ずっと気になっていました。この経験が先ごろ私が初プロデューサーとして上演した創作オペラ「鶴」の原点のような気がしますね。

日本の創作オペラでは、やはり「夕鶴」が決定版と聞いていいでしょう。でも、私としては、地元名古屋から発信する優れた舞台を作りたいという強い思いがありました。この思いが実を結んだのが二年前です。昨年六月、私はフリーとして再出演しましたが、今回の公演は、さしずめ「旗揚げ公演」というところでしょか。作曲家や声楽家に声をかけ、上演実行委員会を立ち上げましたが、やはり制作には膨大な経費がかかります。私財を投じてでも、という気持ちもありましたが、出演者の皆さんに協力していただき、どうやら予算内に収まりました。

いい舞台を作りたい、みんなが感動できる

舞台を、という思いは先ほど述べましたが、実は小学生のころはダンサーにあこがれてたんです。背が低いので、あきらめちゃいましたけど……。でも、やっぱり舞台にかかわる仕事をしたかった。そこで選んだのが裏方。大学を卒業して、名古屋にあった「若尾照明」(現若尾総合舞台)の照明係として就職しました。昭和二十九年のことです。

そのころ、照明はアルバイトとしても、いいカネになる仕事でした。といっても私の月給は四千元。当時の社長は創業者の若尾正也さんで「四千元は保証してやる。食えなかつたらオレのうちでメシを食え」と言われましたね。誠実な人で、私の育ての親です。

名古屋市内のホールといえば松坂屋ホール、市公会堂、県商工館ホールぐらい。そこで月に一、二回、ファッションショーや日本舞踊の照明を担当しました。まだ徒弟制が生きてましたし、一から覚えることばかりで、無我夢中「食うや食わず」の生

活でした。

この仕事は二十年くらい続き、もともとダンスに興味があったので児童舞踊、創作舞踊の台本を手がけるように。しかし、作家じゃないから、童話を基にしたりして……。五十八年に社長に就任してからは社長業を兼ねて、現場もこなしていたものの、これは考えが甘かった。残念ながら、二年目に現場を離れましたが、そのころには会社も組織化され、社内も何となくぎくしゃく、苦勞しましたよ。

思い出もいろいろあります。五十三年度の名古屋芸術奨励賞に決まったときは、ほんとうにびっくり。考えもしなかったことでした。そうそう、五十八年に市芸術創造センターがオープンし、記念の企画が多彩に催されましたが、私には「照明をやれ」と。つまり先行するのはデザインで、一つのモチーフを元に、さまざまな照明デザインを作り、それに合わせて舞踊を踊るというもので、思い出に残っています。

結局、社長十四年、会長八年を若尾総合舞台で過ごしました。入社以来をひっくりめると五十五年、舞台づくり一筋に歩んできました。妻を亡くしたり、途中でやめようと思ったこともありましたが、人間、やはり自分の好きなことをやりとげるのが、一番の幸せではないでしょうか。

フリーを機に、名前も本名の松本吉正から関根正に改めました。もともと台本を書くときは、このペンネームを使っています。余談ながら銀行で口座を新たに開こうとしたら、このペンネームでは通用せず、困りましたけど。

これからは、児童舞踊(王)に、年に一本

くらい名古屋発のいい舞台を作ることに努めていきたいと思っています。

ちなみに新社名「アド・フォンテス」はラテン語で「源流に戻る」の意味です。いままさに私は「源流に戻った」心境にいます。(舞踊批評家協会・阿部孝子)